

境内の死角は時代の死角なり保田與重郎の墓に秋風

中西由起子

滋賀県大津市の義仲寺を訪ねた折の作。義仲寺は、木曾義仲に縁のある寺だが、芭蕉の墓があることで知られている。この一連にも芭蕉のことがうたわれている。さらに、義仲寺には保田與重郎の墓もある。保田は奈良県桜井の出身だが、『芭蕉』『木曾冠者』等の著作があり、荒廃していたこの寺の再興に尽力した縁で彼の墓があるらしい。この一首、かつてスターだった保田與重郎がいまは時代の死角に入ってしまったことをシンボリックにうたっている。

徴兵を逃るる怪我をさせぬやう騎馬戦を見張る我が
もしれず
小川真理子

「……見張る」までがずつと比喩になっているようだ。右傾化してゆく時代のなかで、全体に奉仕する生徒を養成しようとする学校の側に立つ自分なのではないか、という問いかけ。するどい一首。ただ、結句、やや型どおりなのが残念。

蒲公英は綿毛を飛ばす鉢の梅あれあれ斜めに枝伸ば
しおり
水野利顕

二句切れである。タンポポも梅もそれぞれ自在に、勝手気ままにやりたいことやっている。そんな自然の自在さに光を当てた一首。

みずからの内へと向かい咲きし花実りて無花果 暗
く笑えり
谷ちえみ

短歌の現在

No.418

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

イチジクは「無花果」と漢字で書くとながなうだ
が、そうではない。この作にあるように内部に花を咲か
せる。「暗く笑えり」にちよつとした謎があつて、それ
が持ち味になつていよう。

小川祐子

モクセイの歌は多いが、香りを思い切つて視覚化した
工夫に注目した。「金の粒浮きぬるやうな」とくに「浮
く」という動詞をうまく使っている。

秋雨に湿原見えねどうねうねと心に蛇行す釧路の川
は
犬飼亮介

私も、釧路湿原を見晴らす展望台に行つたことがある
ので、作者の思いをなぞることができ。写真で見たこ
とがあるような既視感のことば化に成功している。た
だ、「うねうねと」はもっと工夫したかった。

わが街を出で入るごとに越ゆる河けふ遠景に夕富士
を見す
田中薫

街の近くに運河がある意味だろう。週に何度も、時に
は日に何度も越えるなじみの運河。下句の小さな屈折感
がうまく働いている。なお「河」とあるから運河と受け
とつたが、そうでなければ「川」だろう。

シヤクヤクといふ美しき成分に胃は日に三度うつと
り瀾る
花美月

ツムラ漢方24番という漢方薬の歌三首のなかの一首。
自分にはびつたり。「なんとすばらしい薬！」と礼賛す